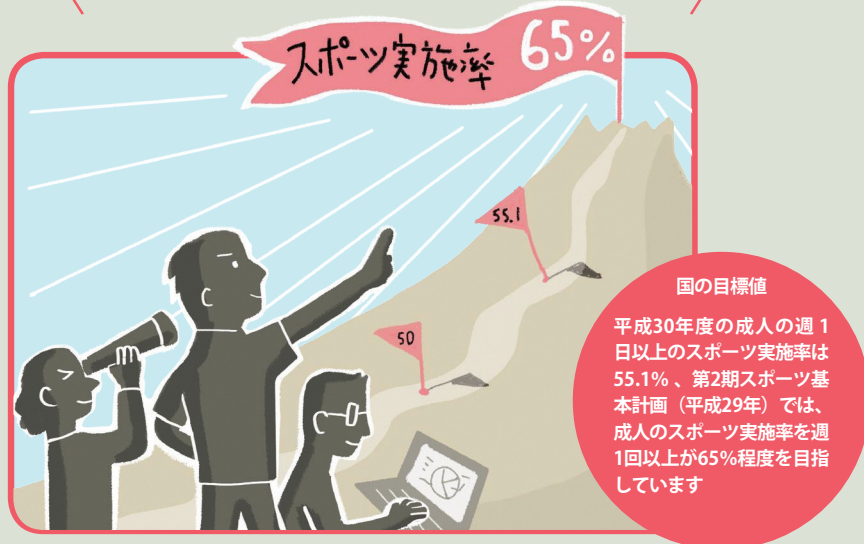


現状の把握からはじまった 推進委員活動の活性化

スポーツ実施率の向上という視点から
これまでの活動を見つめ直しました



豊川市スポーツ推進委員会

今年の「東海四県スポーツ推進委員研究大会」第3分科会（2月2日／以下、地区研）は、いつもにも増して盛り上がりました。なぜなら、豊川市スポーツ推進委員の実践発表に藤枝市（静岡県）スポーツ推進委員が登壇したからです。地区研の発表に先駆け、豊川市スポーツ推進委員会は約1年半前から臨時部会を立ち上げ、既存事業をはじめとする各事業のテコ入れを図ってきました。その過程で総合型地域スポーツクラブとの初顔合わせや、障がい者施設とのコラボを重ね、視察した藤枝市との絆も深まってきました。今号は、豊川市のスポーツ推進委員と事務局担当者にお集まりいただき、活動を振り返りながら、新たなチャレンジを生み出すしくみを探りました。

体育振興会と スポーツ推進委員

豊川市は、市内26小学校校区ごとに組織された体育振興会（町内会、子ども会、老人会等の自治組織の集合体）をはじめ、スポーツ推進委員会、体育協会（スポーツ少年団含む）、総合型地域スポーツクラブ等のスポーツ団体があります。すべてのスポーツ推進委員（計74名）は各体育振興会の推薦によって、市の教育委員会に委嘱され、体育振興会と連携・

協働して事業を推進しています。

話は約2年前（2017年6月時点）に遡ります。愛知県スポーツ推進委員連絡協議会から分科会での発表の依頼を受けた豊川市教育委員会スポーツ課・山口和輝さんは、スポーツ推進委員とともに研究発表のテーマ設定に取り掛かりました。着目したのは週1日以上スポーツ実施率でした。現在の39%（平成26年度）から50%（豊川市スポーツ振興計画の目標値）に引き上げるには、より広く市民に働きかけると同時に、既

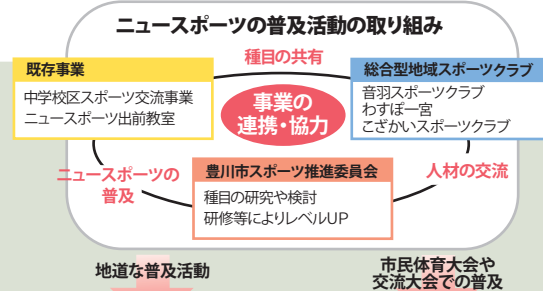


表3 障がい者のスポーツの推進（気づきの整理）

施設側の感想・意見	スポーツ推進委員の感想・意見
・やって良かった ・利用者の楽しそうな様子 ・翌日も「楽しかった」という声 ・職員以外と交流できた ・コミュニケーションが図れた ・いろいろなスポーツを体験	・良い経験ができた ・競技種目の方が人気が高かった ・個性に合わせた対応は難しい ・運営側の体制を整える必要がある
今後も一緒に指導・協力してほしい	施設の職員のサポートが必要

お互いの協力で課題が解決できそう

表2 総合型地域スポーツクラブとの連携



ニュースポーツの広がりや深まり

表1 市民体育大会の見直し

小学種目 小学男子ソフトボール	青年種目 青年男子ソフトボール 青年女子バレーボール	新たな種目 ソフトバレーボール
分析 児童の減少 ソフトボール未経験 代替種目が見つからない 児童減少により、町内でのチーム編成が困難	分析 青年層の減少 趣味の多様化 種目を変更しても参加者が増える見込みが低い 青年層のスポーツ機会の提供を継続	分析 交流大会としての実績 男女混合種目（青年層も含めたチーム編成） 審判や会場の課題も解決
校区選抜方式にて継続	青年と一般の部統合	正式種目として採用

写真前段左から、石原哲男さん、尾藤茂子さん、神谷美也子さん、後段左から、岩本好生さん、柴田功己さん、小久保拓史さん、山口和輝さん



存事業を見つめ直し、効果的な活動へとつなげることが必要ではないかと思いましたが、そこで、尾藤茂子さん（スポーツ推進委員）が旗振り役となって臨時部会を立ち上げ、①「既存事業」②「総合型クラブ」③「障がい者のスポーツ」の3つの部門で分担しながら、現状の把握、課題の洗い出し、課題解決に向けた方策を考えることになりました。

「既存事業」の課題とその対策

「既存事業」では「市民体育大会」と「ニュースポーツ」の見直しに取り組みました。市民体育大会は、7種目9競技（年齢別もあり）に町内会単位でチームを編成し、校区予選↓本戦↓総合優勝を目指す校区対抗の大会です。昭和35年に第1回大会が開始され、今年で60回目を迎えました。

本大会に幼少時代から親しんできた柴田功己委員長は「かつては甲子園のような存在でした」と当時を振り返ります。しかし、少子化、ライフスタイルの多様化等の影響を受け、選手集めに苦慮する校区が増え、参加校区数が減少する種目が出てきた

ため、今回の見直しを契機に、種目の追加や出場資格等の変更に踏み切りました（表1）。これに伴い「ある程度の成果は得ることができましたが、小学生の種目については参加校区が増えず課題が残りました。今後引き続き検討を重ねていきたいと思います」（石原哲男副委員長）。

一方、ニュースポーツは、小学校区（全26区…平成3年）、中学校区（全10区…平成16年）において、スポーツ推進委員が普及を進めてきましたが、各校区に種目選定を委ねてきたため、さまざまな種目が実施されていることが調査で明らかになりました。岩本好生さん（スポーツ推進委員）は効果的な普及のために、新しい種目の必要性を感じていました。

「現状の進め方では広域への展開が困難なため、普及のあり方を根本から見直し、推進委員が普及したい種目を研究・検討し、「目標を持った普及活動」へと転換しようということで見解が一致しました」

豊川市は2年に1回、特徴的な取り組みをしている市町村へ視察に出向いて、相互交流を行っています。

平成29年度は藤枝市に伺い、「ワンバウンドふらばるバレーボール」を指導していただきました。「直感で面白い！と感じました。おむすび型のボールがどこに飛ぶかわからないので笑いが絶えませんし、声をかけ合いながら行うのでチームの団結力も高まります」（岩本さん）。他の推進委員も同じ感想を抱いていたことから、統一的な普及種目として「ワンバウンドふらばるバレーボール」を採用することになりました。今年度は14小学校区、8中学校区で普及を進めています。

「総合型クラブ」の相互交流×スポーツ推進委員の活動

豊川市内には「音羽スポーツクラブ」（平成15年）、「わすば一宮」（平成25年）、「こざかいスポーツクラブ」（平成28年）という3つの総合型クラブがあります。推進委員の3分の1（74名中21名）が総合型クラブに携わっており、その一人、小久保拓史さんは、「私と石原副委員長は、こざかいスポーツクラブに携わっているのですが、以前からクラブ同士のつながり・交流が希薄なこ

なかったので、手つかずでしたが、まずは現場見学という話になり、高齢者施設とボッチャを実施している総合型クラブに神谷副委員長と訪れました（前出・尾藤さん）。「その際、施設の職員の方から、いろいろなスポーツの情報を知りたい」というお声を聞き、参加者に応じた方法で身体を動かしている姿を見て、勉強になりました。と同時に、一緒にやってみないことにはわからないという気持ちが生えてきました」（神谷美也子副委員長）。

そこで、お二人は障がい者施設（軽度の知的障がい者）に声をかけ、職員の方に協力していただきながら、輪投げ、ラダーゲッターなどのニュースポーツ体験会を実施したところ、施設から「利用者さんが喜んでいたら「スポーツのノウハウがないので、指導・協力してほしい」というありがたい申し出がありました（表3）」。

「逆に私たちは障がいの知識が不足しているのでお互いに補いながら、障がい者のスポーツを推進していけたら、と思います。施設には洋式トイレがないところもあり、課題は多々ありますが、今後の展開につな

がる確かな手応えを感じています」（神谷副委員長・尾藤さん）。

豊川市のスポーツの未来

豊川市教育委員会スポーツ課・山口さんは、今回の実践発表の成果を実感している、といいます。

「研究し、発表したことで、団結力が高まり、今まで以上にみんなで普及していこう、盛り上げていこうと雰囲気が変わったと感じています。今後も新たなチャレンジに取り組み、「既存事業」「総合型クラブ」「他市町村との交流」「障がい者施設・団体」をうまくコーディネートしていくことにより、さらに事業を発展させていきたいと考えています」

豊川市は過去に3回、合併を繰り返してきました。その都度、推進委員はさまざまな課題を共有し、乗り越えてきました。

柴田委員長は「我々の活動の基盤は小学校区です。そのことを忘れず、スポーツを通して、住民と顔の見える関係を築いていきたい。そして地に足をつけながら、小さな「気づき」を大切にし、チャレンジし続けたいです」と締めくくりました。